

2019 年度～2022 年度 4 年継続研究

研究主題 「社会を知り、世界を切り拓く北国の子の育成」
研究副主題 ～見方・考え方を鍛え、生きて働く資質・能力
を確かに育む社会科の学び～

北海道社会科教育連盟研究部



Hokkaido 北海道

4 年継続研究～2019・2020・2021・2022～
北海道社会科教育連盟



研究総論

研究主題 「社会を知り、世界を切り拓く北国の子の育成」

研究副主題 ～見方・考え方を鍛え、生きて働く資質・能力を確かに育む社会科の学び～

北海道社会科教育連盟研究部

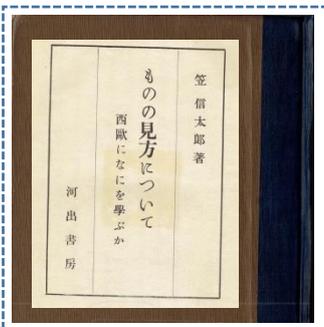


温故知新

北海道社会科教育連盟は、1951 年（昭和 26 年）に発足した。

1951 年というと、サンフランシスコ平和条約の調印、第 1 回NHK紅白歌合戦が始まるなど、戦後の混乱から新しい時代の波が急速に押し寄せた時代である。

この年のベストセラーに「ものの見方について」^{りゅうしんたろう}笠信太郎著がある。68 年を経た令和の時代となっても、実に興味深く、考えさせられる。一部を紹介する。



「もの見方について」
笠信太郎 / 河出書房
1950



「もの見方について
日本人としての教養」
笠信太郎 / ポプラ社
1966

「明治から昭和までの教育は、近代日本を創るのに非常に大きな役割を演じてきたことは確かであるが、その教育は、一面において学問と生活とを直結しようという特別の努力をしなかったばかりか、反対にその間を割くような働きもやってきてゐる。むろんその教育をゆがめたのは、過去における日本独特の鋭角的な国家主義であった。教育は、国家主義をそだてる保母として、そのお守り役をつとめねばならなかったから、歴史学をはじめ他の社会的な科学はゆがめられないわけには行かなかった。」
「昔のように『忠良の臣民』でもなければ、また『強い兵隊』でもなく、『よき市民』をつくるということが、いまの我々の教育理想となったといってもよからうと思う。」
「『よき市民』を作る重要な一課程として、新しく『社会科』という教科がはじめられている。(1950 年（昭和 25 年）夏執筆)」

平成29年告示の学習指導要領における各教科等の「見方・考え方」は、「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」という、その教科等ならではの物事を捉える視点や考え方であり、笠氏の「国民のものの見方や考え方」と意味の異なる部分はもちろんあるが、戦後間もない時代から、生き方の指針として「見方や考え方」が唱えられていたことから学ぶことが大いにある。

研究主題 「社会を知り、世界を切り拓く北国の子の育成」

北国の子への思い

私たちが暮らす北海道は、高いポテンシャルをもっている。毎年、カロリーベースで200%前後を誇る食料自給率(農林水産省HPより)はもちろんのこと、豊富な自然エネルギー資源に恵まれた北海道は、陸上風力、熱水資源、未利用地での太陽光発電が全国で第一位、洋上風力も九州に次いで全国第二位のポテンシャルがある(北海道再生可能エネルギー振興機構HPより)。新型コロナウイルスが流行する以前の外国人来道者は、2017年度で279万人、2018年度で311万人(北海道庁HPより)に上り、2008年度に69万人だった来道者と比較すると200万人以上増えたことになる。それだけ、北海道を観光地に選ぶ外国人が増え、北海道ブランドが世界に認知されるようになった。また、法律に初めてアイヌ民族を「先住民族」と明記したアイヌ新法が成立し、「民族共生象徴空間(ウポポイ)」が2020年7月12日にオープンし、民族教育の足場が北海道にできた。

北国に暮らす子どもは、そのような北海道のよさを捉えているだろうか。前3か年研究では、「地域に誇りをもつ教材化」を視点として掲げ、地域への愛着・愛情を育んだ。責任提案分科会では、道内各地区からの実践報告から、教材となり得る社会的事象を共有することができた。各地区の地域に根ざした授業づくりが進んでいる。こうした前3か年の成果を受け継ぎ、変化の激しい時代を生き抜くために、視野を広げ、社会に参画できる子を引き続き育てていきたいと考える。地域への愛着・愛情をもち、今に、未来に、地域に、社会に参画し、力強く生き抜いてほしいという私たちの願いがある。

地域への愛着・愛情をもち



変化の激しい時代を生き抜く

北海道は豊かである

「雪や寒さは宝である」という言葉に代表される「困難さや厳しさに目を向け、それらを克服している営みに焦点化する教材化」「発想の転換のある教材化」を、私たちは大切にしてきた。冬になれば雪が降る。氷点下の日が続く。雪や寒さは北国の子にとっては当たり前にある自然の産物だ。時に、雪は交通を麻痺させ、氷は事故を引き起こし、寒さは命を奪うことがある。暖かい地域に暮らす人々から見ると、一見、「雪や寒さは生活をする上での困難さや厳しさを与えるもの」としてマイナスに捉えられるかもしれない。

しかし、北海道民は違う。北国に暮らす人々の中には、元々「気候風土に合わせた生活文化」がある。知恵を働かせ、雪をキャベツの甘みを増幅させるように利用したり（和寒町雪の下キャベツ）、貯蔵して夏の冷房に使ったり（札幌市モエレ沼公園雪氷熱利用）している。私たちが暮らす北海道には、雪や寒さも大自然が与えた恵であると捉え、日々の暮らしに活用しようという考え方が根付いている。北国の素晴らしさを学ぶ素地がたくさんあるのである。北海道社会科教育連盟は、それらを教材化し、実践を積み上げてきた。北海道の当たり前を見つめ、俯瞰して北海道のよさを捉えられる北国の子を引き続き育てていきたい。

学習指導要領の改訂

学習指導要領が改訂され、小学校は昨年度、中学校は今年度全面実施となった。今回の改訂の基本的な考え方として「これまでの我が国の学校教育の実践や蓄積を生かし、子供たちが未来社会を切り拓くための資質・能力を一層確実に育成することを目指す。」と総則で述べられている。学習指導要領で述べられている子ども像を受け、次のことを重視した。

【今を見つめ、未来社会を見据える】

これからの社会は「Society1.0（狩猟社会）」「Society2.0（農耕社会）」「Society3.0（工業社会）」「Society4.0（情報社会）」に続く、人類史上5番目の新しい社会「Society5.0（超スマート社会）」に変わっていく。変化の激しい時代を生き抜くために、4年間で育てていきたい子ども像を設定した。

- ① 物事の本質を見極め、学んだことを他の学習や生活に活用できる子
- ② 主体的に、協働的に学び、視野を広げ、発想を変え、自分の力で自分の可能性を広げていくことができる力強い子
- ③ 自分の世界を広げ、未知の世界、未来の世界に向かって自分の力を試し、共生の世界を創っていく子



Society5.0（超スマート社会）
内閣府作成

社会を知る



丸谷 智保 会長
(株)セコマHPより

そのためのキーワードが、「社会を知る」「世界を切り拓く」の二つである。

(株)セコマの丸谷智保会長は、「初山別村への出店話が持ち上がった時、初山別村が北海道のどこにあるのか、どのくらいの人が住んでいるのか全く知らなかった。しかし、実際に行ってみると、ハスカップやよもぎの宝庫で、新商品の開発に役立つものがたくさんあった。」と話している。その素材を使い、2019年7月に「初山別産北海道ハスカップアイス」を新発売した。

北国に暮らす子どもたちは、どれだけ北海道のこと、今の社会のことを知っているだろうか。今の社会を知ることで、新商品を開発した(株)セコマの丸谷会長のように、未来社会の切り拓き方が違ってくると思う。社会を知るために、根拠をもって追究する、多面的・多角的に考える、多様な価値観に触れ本質を見極めることが必要である。社会科の学びの中で社会を知り、理解の質を高めることを重視する。

世界を切り拓く

未来社会を切り拓くには、自分の世界「one's world」を広げること、世界「world wide」に目を向け行動することが必要と考え、「世界」を以下の4つに定義付けた。

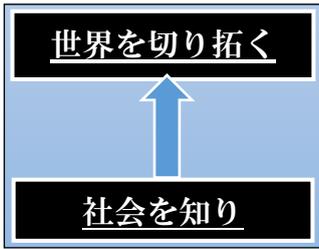
- 自分の世界
- 未知の世界
- 未来の世界
- 共に生きる世界

自分の世界「one's world」～自分の世界・未来の世界

「世界」という言葉は、地球規模というイメージが強いが、本研究では、自分自身の可能性や自分を取り巻く環境という意味を含む。社会科の学びの中で社会を知り、理解の質を高めていくことで、子ども自身が自分の可能性を広げたり、自分を取り巻く環境をよりよくしたりできると考える。

世界「world wide」～未知の世界・共に生きる世界

「SDGs=2030年を年限とする17の目標」に、今、世界中の国々が取り組んでいる。これからの時代は、今まで以上に、世界の人々と手を取り合い問題解決していく時代となる。やがて迎える「Society5.0(超スマート社会)」。IoT(Internet of Things)で全ての人とモノがつながり、様々な知識や情報が共有され、今までにない新たな価値を生み出すことで、様々な課題や困難を克服する社会が来る。未知の世界に適応し、全ての人とモノと共に生きる力が求められる。



こうした現状を踏まえ、2030 年前後に社会に出て、2040 年前後にはミドルリーダー層となって活躍していく子どもたちにとって「社会を知る」こと、「世界を切り拓く」ことは、その時に生きて働く資質・能力を育む上で欠かせないキーワードになると考えた。

コロナ禍の世界で

2020 年、新型コロナウイルス感染症が猛威を振るった。世界中の経済がダメージを受け、多くの命が失われた。未知のウイルスに立ち向かう人類は、知恵を結集し、問題解決能力を駆使し、ワクチンや治療薬の開発、治療方法の確立を急いでいる。

目の前の困難にぶつかった時、人は必ず協力する。コロナウイルスを一人で撲滅することは不可能であるが、一人、二人、十人、百人…と、研究者、医療従事者、科学者などがそれぞれの強みを生かして解決を図ろうとしている。教育者である私たちも、感染拡大を阻止しながらも教育活動をどう充実させていくか、頭をフル回転させて常に考えている。

このような事態になり、「共生」「共存」が大切であることが改めて明らかとなった。今こそ、人の営みを学ぶ「社会科」の出番である。社会科で取り上げる人の営みは、社会をよりよくするための営みである。困難や課題を克服したり解決したりする営み、新たな価値を生み出す営み、持続可能な営みなど、夢や希望があふれる営みがたくさんある。それらを学ぶことが社会科の醍醐味であり責務でもある。地球規模の問題をすぐには解決できないが、まずは目の前のこと、愛する地域のことから考え行動する。そのような人の営みを取り上げる教材化は、私たちが強みとしてきたことである。



- ・ H8 「定住促進事業の実践」～急速な人口減少や高齢化への対策
⇒人口増加に転じた上士幌町／住みたい田舎ランキング上位三笠市
- ・ H9 「物流の実践」新千歳空港の貨物エリアを成田空港の 1.5 倍に
⇒貨物の取扱量が 10 年で約 2 万トンも増加

20 年前に取り上げた社会的事象が、課題を克服し、明るい未来として、今現実のものとなっている。そうした学びを充実させることで、北国に生きる子ども（小中学生）約 40 万人（2020 年住民基本台帳）を、排除の文化ではなく、共生の文化を創る子に育てたい。自分の世界を広げ、認め合う社会、温かい社会、人間らしい社会を構築できる人間になってほしい。その実現のために、研究主題を「社会を知り、世界を切り拓く北国の子の育成」と設定する。

研究副主題「見方・考え方を鍛え、 生きて働く資質・能力を確かに育む社会科の学び

研究主題で掲げた子ども像を実現する授業はどうあるべきか。それは、私たち北海道社会科教育連盟が発足して以来、積み上げてきた問題解決的な学習がベースになると考え、研究副主題を上記のように設定した。

見方・考え方を鍛える

小学校学習指導要領解説社会編では、社会的な見方・考え方について次のように述べられている。

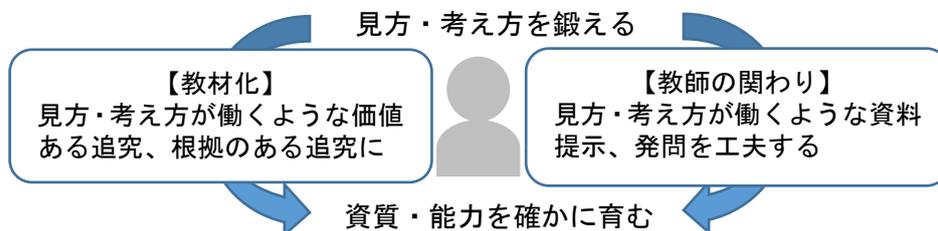
『社会的な見方・考え方』は、小学校社会科、中学校社会科において、社会的事象の意味や意義、特色や相互の関連を考察したり、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて構想したりする際の『視点や方法(考え方)』であると考えられる。そして、『社会的な見方・考え方を働かせ』るとは、そうした『視点や方法(考え方)』を用いて課題を追究したり解決したりする学び方を表すとともに、これを用いることにより児童生徒の『社会的な見方・考え方』が鍛えられていくことを併せて表現している。

そこで、本研究では、社会的な見方・考え方を鍛えるために、

- 正しい教材化のもと、子ども自らが対象に関わり、社会的な見方・考え方を働かせ、理解の質が高まる学びにする。
- 授業をつくる過程で、働かせる社会的な見方・考え方を吟味する。そのために、単元の学習問題や本時の問いを、価値ある追究、根拠のある追究になるように設定する。
- 社会的事象の見方・考え方(小学校)、社会的事象の地理的な見方・考え方、社会的事象の歴史的な見方・考え方、現代社会の見方・考え方が働くように、教材化や資料提示、発問を工夫し、教師が意図的に関わる。

ことを重視する。

学習指導要領では、見方・考え方を働かせていくことで、自ずと鍛えられていくと述べられているが、本研究では、上記のようなことを重視することで意図的に見方・考え方を鍛えていく。なぜなら、見方・考え方を鍛えることで、資質・能力を確かに育むことができると考えるからである。



確かに育む

目の前にいる子どもたちとの授業は、その瞬間その瞬間が勝負である。私たち教師は、教師人生において何度か同じ単元、同じ本時を経験することができる。しかし、子どもたちは、彼らの人生において、一つの単元の授業は人生一度切りである。研究討議の中で、「この時間で子どもにどのような力が身に付いたのか。」「その教材化は、教師の教材解釈に偏ってはいないか。事実に基づいているのか。」と話題になることがある。私たち教師は、単元全体の学び、1単位時間の学び、それぞれに責任をもたなければならない。

そこで、本研究では子どもの資質・能力を「確かに育む」ことを重視する。「確かに」という言葉を大切にすることで、子どもの資質・能力を育むことにしっかりと責任をもつ。そのために、単元全体を通して育むべき資質・能力を明確にすること、学ぶ前と学んだ後の子どもの姿の変容を明確にすることを重視する。単元の学びを通して、何ができるようになったのか、何を学び何が分かったのか、資質・能力は確かに育まれたのかを検証する。

生きて働く

また、その資質・能力が「生きて働く」ように、一人一人が学んだことを実生活にどう活用するか、未来の世界にどうつなげていくか、社会との関わりにどう関係付けていくのかについて考えていく。北海道社会科教育連盟では、これまでも「社会参画」の芽を養うことを重視し、6年間、「社会参画」という文言を研究主題に掲げてきた。その財産を、本研究にも活かしていく。

副主題を「社会科の授業」ではなく「社会科の学び」とした。それは、学びの主体者は子どもであり、子ども目線で授業を作るという意味である。

子どもと社会的事象との出会いをどのように設定するのか、子どもが問題意識をもつために教師はどのように関わるのか、単元のまとめの活動は本当に子どもがやりたいと思う必要感のある活動になるのか、単元構成や本時の学習展開を子ども目線で考えていくのである。

私たちは社会科の教科研究をする団体である。社会科好きの集まりである。教材研究する中で、子どもに知ってほしいこと、活動させたいこと、考えさせたいことがたくさん生まれる。しかし、それらが子どもの意識とかけ離れては、資質・能力を「確かに」育むことはできない。それどころか、子どもにとって「つまらない学び」になってしまう。子どもが前のめりに、楽しみながら、社会科好きになるような学びを構築していくのである。

これらのことを具現化するために、次の3つの研究内容を設定する。

社会科の「学び」

私たちの根底にある教材観は、次の2つである。

研究内容 I 確かな社会認識を 生む教材化

子どもがその時々
の社会の在り方と具
体的人物の営みを結
び付けて、社会的事
象の意味を深く理
解できるように教
材化する。

雪や寒さは宝である

- ・ 困難さや厳しさに目を向け、それらを克服している営みに焦点化する。
- ・ 自然の恵みを生かし、新たな価値を生み出している営みに焦点化する。
- ・ 北国にふさわしい産業社会の創造をしている営みに焦点化する。

発想の転換

- ・ マイナス思考をプラス思考に変換する。
- ・ 新しい価値観を創造する。
- ・ 物事を一面的に捉えず、多面的に捉える。

人は長い歴史の中で、よりよい社会をつくろうと努力してきた。その時々
の社会の在り方と人の営みを結び付けて深く理解することが、これからの
社会をつくっていく子どもたちには必要である。

令和元年11月に開催した第74回北海道社会科教育研究大会蘭越大会
小学校第3学年部会の授業では、トマト農園気田さんの営みを教材化
した。気田さんは、より美味しいトマトを消費者に届けるため、厳

どうして2回も選果しているのだろう？

○選果の理由を考え、ノートに書き、交流する。

AI的思考

- ・ 届くまでに時間がかかるからチェックが大事
- ・ 決まりがあるから
- ・ 機械で選果することで、見逃さずにすむ

人間的思考

- ・ いいものを売らないと儲からない
- ・ きれいなトマトを売りたい
- ・ 食べる人に、おいしいと言ってもらいたい

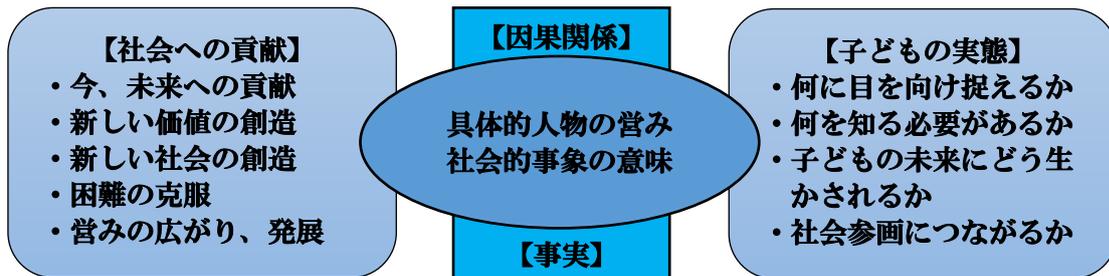
買う人に、いいトマトを届けるために、2回も選果している。

しい選定基準を設け、2回の選果を行っている。子どもは「1回の選果でも十分美味しいトマトなはずなのに、どうしてそこまで厳しくするのだろう。」と疑問をもった。気田さんの営みの中に隠れている「人の意志」に焦点化したのである。そこに目を向けた子どもは、その理由を知りたくてたまらなくなり、農家に寄り添いながら共感的に理解していった。「どのトマトも一生懸命作ったけれど、真に美味しいトマトだけを自信をもって消費者に届ける。」その価値を深く理解したのである。

私たちの根底にある教材観を生かしながら、「確かな社会認識を生む教材化」を図ることを研究内容 I として設定する。

確かな社会認識を生むために、以下の2点を大切にする。

- 具体的人物の営みや社会的事象のもつ意味がどう社会に貢献しているのかを徹底的に深掘りする。
- 事実を集め、子どもの実態と合わせて、因果関係が明らかになるように教材化する。



**研究内容Ⅱ
子どもの変容を
生む単元構成**

単元を貫く学習問題を設定し、単元を通して理解の質を高め子どもの変容を生むように単元を構成する。

単元を貫く学習問題の設定

子どもの主体的な追究となるように、単元を貫く学習問題を設定する。設定する際には、価値ある追究、根拠のある追究、子どもが追究したくなる問題か検討を重ねる。

第75回北海道社会科教育研究大会上川大会（オンライン開催）小学校第6学年部会の授業では、不平等条約の改正に向けた

日本の歩みを教材化した。単元を貫く学習問題を設定する際には、

- ・二つの風刺画から、当時の日本の国際的な地位を捉える。
- ・資料の比較から、日本の立場が変化した理由を予想する。

という手立てをとった。それによって、子どもにとって、必要感のある学習問題が設定できたという成果があがった。

【単元を貫く学習問題】

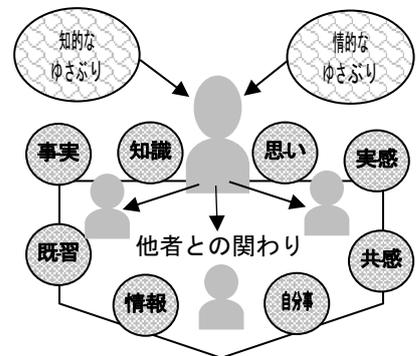
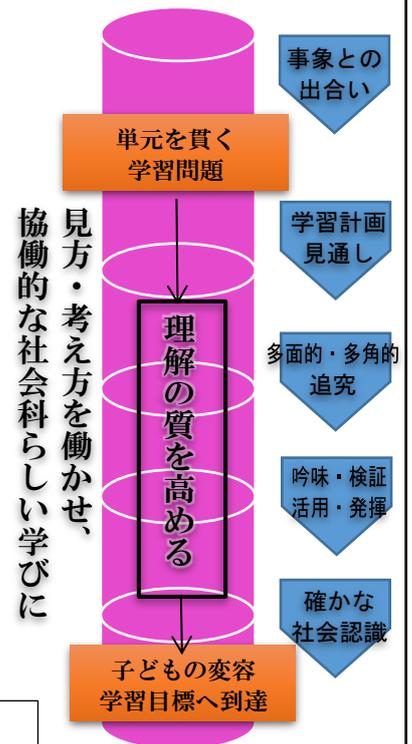
なぜ、日本は欧米諸国と対等な関係になることができたのだろうか。

理解の質を高める

学習問題を追究する過程で、子どもは知識・事実・既習・新たな情報を根拠に問題解決に向かう。しかし、一人では独り善がりな考えでしかないため、他者との関わりが必要になる。他者の考えに触れ、比較したり、つなげたり、補完したり、吟味したり、俯瞰して見たりしながら、社会的事象や人物の営みに共感する。その過程で、教師が効果的に子どもの知的な面と情的な面をゆさぶって、子どもは「社会的事象の意味や意義」を捉え、理解の質を高めていくのである。

変容を生む

単元の終末において、吟味・検証・再考したり、積み上げた知識を活用・発揮したりする場を設け、確かな社会認識に導き子どもの変容を促す。「子どもの変容」とは、「 $A \Rightarrow B / A \Rightarrow A A / A \Rightarrow A' / a \Rightarrow A$ 」のように単元の初めの社会的事象の捉えが、学びを通して見直されたり、深まったり、意味が付加されたりし、変化していくことである。子どもは、何が理解できていて、未だに理解できていないことや解決できていないことは何かを、個人として集団としてしっかりと振り返り、学びを進めていく。その積み重ねが、単なる知識の獲得や表面的な理解に終わらず、理解の質が高まり、確かな社会認識へとつながる。1年次、2年次の実践で、単元を通して関係図や年表を書き足すことや、単元を貫く学習問題に立ち返りながら振り返りを行うことが、子どもの変容を促す有効な手立てであると明らかになっている。



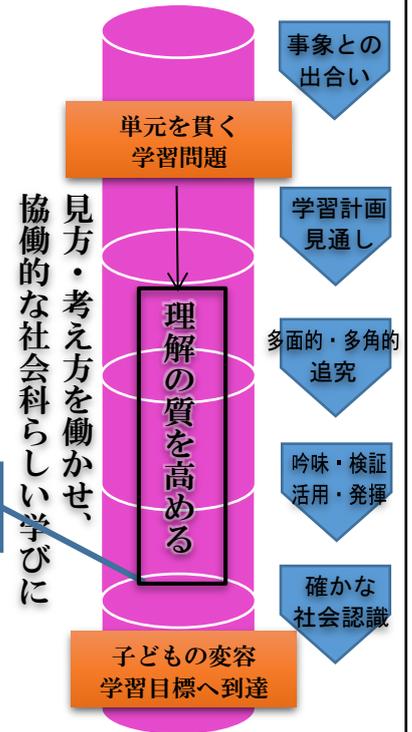
**研究内容Ⅲ
社会的事象の意味を
明らかにする本時**

理解の質を高め、確かな社会認識へ導く本時。単元の後半に意味のある意図的な1単位時間を設定する。

北海道社会科教育連盟がこれまで大切にしてきた本時。全国に向けて発信する3年次、4年次の実践で強く主張していきたい。

単元を貫く学習問題を解決しようと追究を進めてきた子どもたちに対し、「社会的事象の意味を考える」1単位時間を設定するのである。その時間は、単元において、理解の質を高め、確かな社会認識へとつながる重要な時間となる。そのために、次の3つの手立てをとる。

意味のある意図的な本時



問いを生む

本時の問いとは、教師が与えるものではなく、生活経験や既習を基にした子どもの理解をゆさぶり、新たな社会的事象との出会いから、ズレが生じ、因果関係思考に導かれるものである。「なぜ、どうして」という問いが生まれることで、社会的事象の意味を明らかにしようという強い感情が生まれる。これこそが、理解の質を高め、確かな社会認識につながる原動力となる。教師は、子どもの意識を丁寧に紡ぎながら「〇〇なはずなのに、なぜ、〇〇なのだろう。」という問いを子どもと一緒につくるのである。

考えをつなぐ

生まれた問いを明らかにするために、子どもは調べたり、考えたりする。しかし、一人では一面的な考えでしかないので、教師が意図的に関わり、見方・考え方が働くようにしたり、多様な考えが表出するようにしたり、追究の角度や方向を変えたり、一般化を図ったりしながら、協働的な学びを通して解決に向かうようにする。その際に、比べたり(比較)、つなげたり(関連)、絞り込んだり(焦点化)することが教師の関わりとして重要になる。



吟味・検証・再考する

本時の終末において、吟味・検証・再考する場を設け、理解の質を高める。分かったつもりではなく、確実に分かる終末にするのである。何がはっきりして、何が未だにはっきりしていないのか、本時で解決したと思っていることは本当に正しいのか、怪しい点はないのかを、個人として、集団として振り返ることが重要になる。社会的事象の意味を真に明らかにすることが大切である。本時の問いや単元を貫く学習問題に立ち返りながら振り返ることも有効な手立てである。

【研究主題】

社会を知り、世界を切り拓く北国の子の育成

「社会を知る」

地域への愛着・愛情を基に、多様な価値観に触れ本質を見極めることができる子に。今に、未来に、地域に、社会に参画し、力強く生き抜く子に。

「世界を切り拓く」

自分の世界を広げ、認め合う社会、温かい社会、人間らしい社会を構築できる人材を育てていく。排除の文化ではなく、共生の文化を創る子に。

「北国の子」

雪や寒さは大自然が与えた恵である。「困難さや厳しさを克服する」「発想を転換しマイナスをプラスに変える」。そのような捉え方ができる子に。

目指す
子どもの姿

- 物事の本質を見極め、学んだことを他の学習や生活に活用できる子
- 主体的に、協働的に学び、視野を広げ、発想を変え、自分の力で自分の可能性を広げていくことができる力強い子
- 自分の世界を広げ、未知の世界、未来の世界に向かって自分の力を試し、共生の世界を創っていく子

【研究副主題】

見方・考え方を鍛え、生きて働く資質・能力を確かに育む社会科の学び

研究内容 I

確かな社会認識を生む教材化



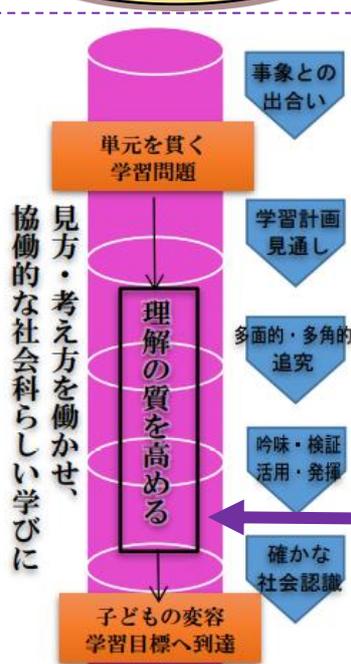
教材との出会い



確かな社会認識

研究内容 II

子どもの変容を生む単元構成



研究内容 III

社会的事象の意味を明らかにする本時

意味のある意図的な本時



「資質・能力」が確かに育まれる

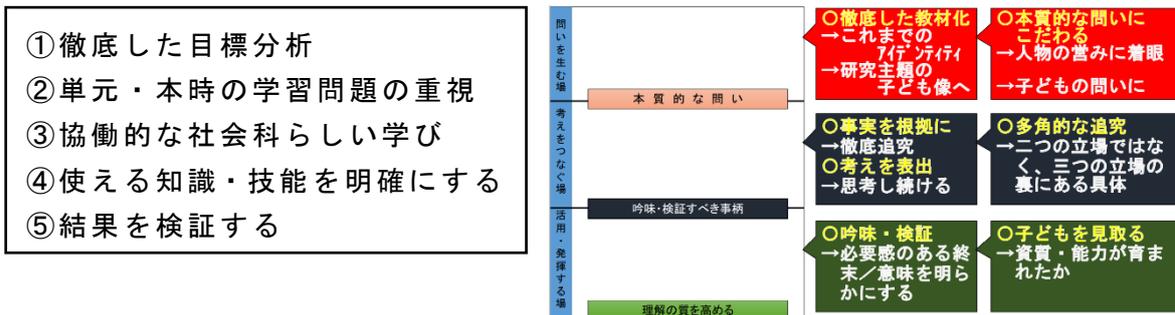
研究副主題（授業像）を具現化する研究内容

<p>研究内容Ⅰ 確かな社会認識を生む教材化</p> <p>子どもがその時々 の社会の在り方と具 体的人物の営みを結 び付けて、社会的事 象の意味を深く理解 できるように教材化 を図る。</p>	<p>子どもがその時々 の社会の在り方と人 の営みを結び付け て深く理解できる ように教材化を図 る。</p> <p>○具体的人物の営みや社会的 事象のもつ意味が どう社会に貢献し ているのかを徹底 的に深堀する。</p> <p>○事実を集め、子 どもの実態と合わ せて、因果関係が 明らかになるよう に教材化する。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; padding: 5px; width: 20%;"> <p>【社会への貢献】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今、未来への貢献 ・新しい価値の創造 ・新しい社会の創造 ・困難の克服 ・営みの広がり、発展 </div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; padding: 5px; width: 20%; text-align: center;"> <p>【因果関係】</p> <p>具体的人物の営み 社会的事象の意味</p> <p>【事実】</p> </div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; padding: 5px; width: 20%;"> <p>【子どもの実態】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・何に目を向け捉えるか ・何を知る必要があるか ・子どもの未来にどう生かされるか ・社会参画につながるか </div> </div>
<p>研究内容Ⅱ 子どもの変容を生む単元構成</p> <p>単元を貫く学習問題 を設定し、単元を通 して理解の質を高め 子どもの変容を生む ように単元を構成す る。</p>	<p>単元を貫く学習問題の設定</p> <p>子どもの主体的な追 究となるように、単 元を貫く学習問題 を設定する。設定す る際には、価値ある 追究、根拠のある追 究になるように検討 を重ねる。</p> <p>理解の質を高める</p> <p>学習問題を追究する 過程で、子どもは知 識・事実・既習・新 たな情報を根拠に問 題解決に向かう。そ の過程で、他者の考 えに触れ、比較したり、 つなげたり、補完し たり、吟味したり、 俯瞰して見たりしな がら、社会的事象や 人物の営みに共感 する。</p> <p>変容を生む</p> <p>単元の終末におい て、吟味・検証・再 考し、積み上げた知 識を活用・発揮し たりする場を設け、 確かな社会認識に 導き、子どもの変容 を促す。</p>
<p>研究内容Ⅲ 社会的事象の意味を明らかにする本時</p> <p>理解の質を高め、 確かな社会認識へ 導く本時。単元の 後半に意味のある 意図的な1単位時 間を設定する。</p>	<p>問いを生む</p> <p>本時の問いとは、 教師が与えるもの ではなく、生活経験 や既習を基にした 子どもの理解をゆさ ぶり、新たな社会的 事象との出会いか ら、ズレが生じ、 因果関係思考に導 かれるものである。</p> <p>考えをつなぐ</p> <p>教師が意図的に 関わり、見方・考 え方が働くように したり、多様な考 えが表出するよう にしたり、追究の 角度や方向を変え たり、一般化を図 ったりしながら、 協働的な学びを通 して解決に向かう ようにする。</p> <p>吟味・検証・再考する</p> <p>本時の終末にお いて、吟味・検証 ・再考する場を設 け、理解の質を高 める。分かったつ もりではなく、確 実に分かる終末 にする。</p>

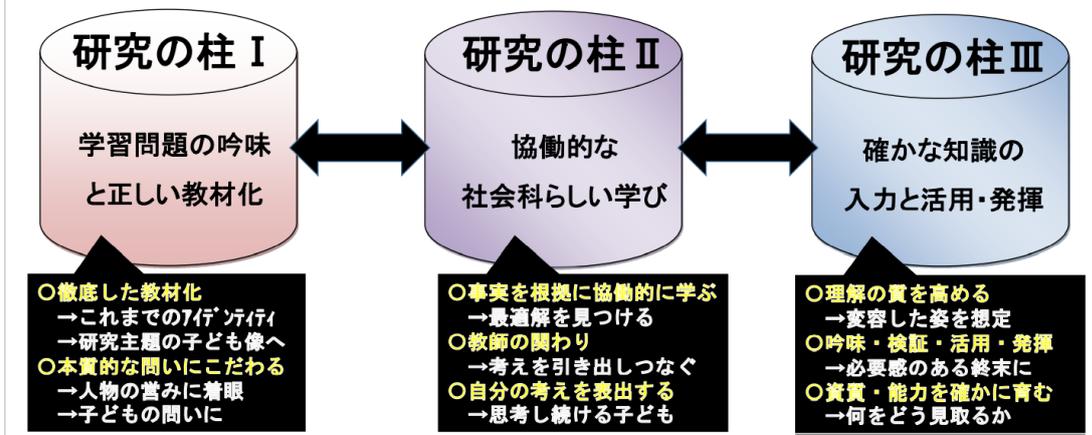
前半2年を終えて

2019年度から始まった4か年研究を「チャレンジの前半2年」「固め、発信する後半2年」と設定した。2022年度の全国小学校社会科研究協議会研究大会北海道大会において、70年以上かけて積み上げた北海道の社会科教育を、子どもの姿と私たちの実践を通して自信をもって発信していきたい。これまでもこれからも、目の前の課題と一つ一つ向き合いながら、一步一步着実に歩みを進めていく。

第74回北海道社会科教育研究大会蘭越大会、第75回北海道社会科教育研究大会上川大会（オンライン実施）では、以下の5つの視点と2年目に向けての重点から、「各地区は生きて働く資質・能力を『確かに』育むためにどのような授業をつくり、有効な手立てを取ったのか」について交流し、全15地区の先生方と共通理解を図ることができた。



2年目に向けて



第74回北海道社会科教育研究大会蘭越大会では、「教材化の後志」と言われてきた後志地区の尽力のおかげで、「徹底した取材と教材研究、事実に基づいた追究、働かせる見方・考え方の吟味」これらに裏打ちされた教材化が子どもの学びの土台となることが明らかとなり、大きな成果となった。一方で、単元の学習問題と本時の学習問題について、指導案を考える際や実践を振り返る際に、「子どもが本当に解決したいと思える学習問題になっているか。」を吟味・検証することが大切だと共通理解できた。

また、既習や事実から知的に追究すること、人の営みに情的に寄り添い追究すること、どちらも社会科らしい学びと言えるが、そのバランスを考慮する必要があることが分かった。学年が上がるにつれて「知的に追究する割合を高めていく」「事実に基づいて思考し、理解の質を高めていく」授業の構築が、子どもの資質・能力を確かに育むことにつながると明らかになった。

第75回北海道社会科教育研究大会上川大会（オンライン実施）では、コロナ禍においても研究と実践を続けた上川地区の尽力のおかげで、本研究の中心課題である「子どもの資質・能力は確かに育まれたのか。」について、大きな成果を得ることができた。上川地区の子どもは、単元を通して学びを積み上げ、本時でその学びをすべて発揮していた。主体的・対話的に学びを深めていく姿は素晴らしいものであった。その手立てとして有効であったのは、振り返りである。毎時間、学んだことを子ども自身が確かめ、その価値を捉えることができていた。

一方、蘭越大会同様に、本時の問いをどのように生むのか、生んだ問いは、子どもが解決したいと思うような「必要感のある問い」になっているのか、検証する必要性が共通理解された。

3年目の札幌大会に向けて、単元を貫く学習問題、本時の問いについて今一度整理をし、研究を進め、深めていく。

最後に

「SDGs = 2030年を年限とする17の目標」の4番目は、『質の高い教育をみんなに』である。すべての人々に包摂的かつ公平で質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進することを目指している。北海道社会科教育連盟は、旭川・網走・石狩・胆振・渡島・上川・釧路・札幌・後志・空知・十勝帯広・根室・函館・檜山・留萌の15地区（50音順）からなる。

全道一丸となって、質の高い社会科教育を北海道の子どもたちに提供し、第60回全国小学校社会科研究協議会研究大会北海道大会において、私たちの実践と、素晴らしい子どもの姿を全国の先生方に力強く発信したいと願っている。

参考文献・引用文献

・「ものの見方について」	笠信太郎	河出書房	1950
・「ものの見方について 日本人としての教養」	笠信太郎	ポプラ社	1966
・「世界の人生論6」	笠信太郎	角川書店	1968
・「北海道社会科教育連盟創立50周年記念誌『北の社会科を創る』」	記念誌特別委員会		2000
・「中教審『答申』を読み解く」	石井英真	日本標準	2017
・「『資質・能力』と学びのメカニズム」	奈須正裕	東洋館出版社	2017
・「『思考力・判断力・表現力』を鍛える 新社会科の指導と評価」	北俊夫	明治図書	2017
・「授業の見方『主体的・対話的で深い学び』の授業改善」	澤井陽介	東洋館出版社	2017
・「AI vs 教科書が読めない子どもたち」	新井紀子	東洋経済新報社	2018
・「小学校 新学習指導要領 社会科の授業づくり」	澤井陽介	明治図書	2018
・「『ものの見方・考え方』とは何か」	北俊夫	文溪堂	2018
・「深い学び」	田村学	東洋館出版社	2018
・「小学校新学習指導要領 社会科の授業づくり」	澤井陽介	明治図書	2018
・「教師の学び方」	澤井陽介	東洋館出版社	2019